

## 金賞

### 私の妹

横須賀市立馬堀中学校三年

市原 愛佳

私の妹は、私が四歳の時に生まれました。順調に育っているように見えたのですが、一歳になっても二歳になっても言葉を話さず、コミュニケーションを取るのも難しい状態でした。二歳になった時、両親が保健士さんに相談し、療育センターを紹介され、そこで医者さんに重度の発達障害があると診断されました。その日は丁度父の誕生日で、しばらく言葉が出ず、私に見つからないように振舞いながら涙を流していた父の姿を今でも忘れません。私は小さかったため、それがどのような病気なのか、これからどうなるのかをまだ完全には理解することが出来ませんでした。

私が妹を徐々に理解していく事ができるようになってきたのは、妹が障害児の通園施設に通うようになってからです。妹は通園施設を卒業後、普通級の学校へは行かず、特別支援学校へ入学しました。その時私は、小学四年生でした。その年のある日、私は両親に連れられて、妹の授業参観に行きました。私が特別支援学校に行くのは、それが初めてでした。特別支援学校では、一クラス約十人の生徒を

三人の先生が対応しており、私はその対応に驚かされました。発達障害や知的障害には、障害が重たい人から軽い人、言葉が出ない人や文字が読めない人など様々な障害の程度がありますが、先生方はそれぞれの子供たちの発達に合わせた関わり方、教え方をしていました。私はその対応を見て、一人ひとりに合った関わりをすることで、子ども達一人ひとりを理解し、能力を最大限に引き出すことができるのだということが分かり、すごいと思いました。自分もそれをきっかけに妹に対する考え方が変わり、両親がしていた妹の世話や手伝いをするが増えました。妹は急に怒ったり走ってどこかに行ってしまったりするので、初めは気持ちを理解するのがとても大変で、きつく言い過ぎて泣かしてしまったりすることもありました。ですが、きつと私には分からない何かは妹の心の中にはあるのだなと思うようにするなど、必死に理解するように努力しました。また、自分の気持ちを分かってもらえるようにいろいろ考えたりもしていました。それからの私は、きつい言葉を使うのはやめ、そして何でも全てやってあげるのではなく、私が優しく手本を見せ、できそうだったらそばでじつと見守ってあげるようにしました。ご飯を食べるときも、食べにくそうだったら食べさせてあげるのではなく、食べやすいように細かく切ったり、手にスプーンを持たせて食べ方を教え

て自分で食べてもらったりと、自分で出来ることを増やしてあげられるようにしました。色々と考え、妹とがんばりましたが、慣れるまではかなりの時間がかかりました。でもこのように、妹が一生懸命がんばっている姿を見て、私自身も自分の勉強や生活をがんばるぞ、という気力がわいてきました。

妹は、体を動かすことが大好きです。妹が小学校一年生の時、両親と一緒に妹の学校の運動会に行きました。運動会が始まり、プログラムは準備体操、ダンスと進んでいきます。驚く事に妹は、ほとんど間違えることなく体操とダンスをやり遂げました。次はリレーです。妹は選手に選ばれ、見事に一位でした。私はとても嬉しくなり、家に帰ってから沢山妹を褒めてあげました。妹はとても嬉しそうでした。このようにして、私は徐々に妹のこを受け入れ、両親とともに妹との絆を深めていったのです。

私が絶対にしない事、それは妹を隠す事です。隠してしまう事で、妹は人との繋がりを無くし、家にこもってしまう危険があると思うからです。私が小学生の時、友達の家遊びに行ったり、友達が遊びに来たりすることが沢山ありましたが、そこにはほとんど妹もいませんでした。初めのころは、戸惑っていた友達もいましたが、関わりを多くもっていく事で皆、次第に受け入れてくれるようになりました。

そのおかげで妹は家に閉じこもりになる事がなく、伸び伸びと成長する事ができています。私は妹を受け入れてくれる多くの友達に感謝しています。

妹をなかなか受け入れられず、どうしていいか分からなかったあの頃の私、しかし、両親、学校、デイサービス、私の友達、その他大勢の人との関わりで、妹は大きく成長し、私自身は心から妹を受け入れられるようになりました。妹は今年十一歳になりました。これから妹のために、そして私自身のために、関わりのある多くの人たちを大切にし、感謝をもって妹とともに生きてゆきたいと思えます。

人は、今元気であっても、明日は分かりません。そう考えると、障害があっても無くてもみな平等だと思います。妹を見ていると、世の中が、障害者に対する差別の無い世界であって欲しいと心から思えます。